

部品
用品
整備

最新
動向

テクレーダー

30

新基準対応ヘッドライト テスト(第二世代)

より見やすく操作性も向上した
今がホントの“買い”!?



◀テスト上部のダイヤルとスクリーンが機械的に連動している。調整時はダイヤルを回して先にスクリーンを合格位置にセットし、カットオフがスクリーンの中心に合うまでライト側を調整する。



ホンダ「オデッセイ」や「レジェンド」が採用する「Zビーム」を含めた、あらゆるヘッドライトの配光パターンを画像処理し、見やすく表示する(発売日未定)。

従来機でも正しく検査できる…!?

数年前から国の車検場は順次「新基準対応ヘッドライトテスト」が導入されているが、民間車検場についてはテストの買替えに伴う経済的負担を考慮し、当分の間は「スクリーン」や「壁」を使用した簡易検査を認めている。そのため従来型のヘッドライトテストでも検査ができないことはない。

ただ、あくまで簡易的な検査に過ぎないうえ、一部の工場では誤った解釈のもと検査を行っているケースもあり、最近は車検(板金)後に「光軸がずれた」とクレームを受けるケースが増えている模様だ。

誤った検査方法の代表例は、新基準対応ヘッドライトの走行用ビーム(上向きビーム)を従来型テストに照射し、従来の方法に基づいて上向きビームを計測・検査・調整することだ。

ヘッドライトテストのメーカーによると、このような調整をしてから下向きビームに戻すと左右方向へ振れる可能性が高く、合格範囲から大きく外れてしまうのだという。

中には検査前より光軸が上向くこともあるそう。もし走行中に対向車からパッシングをされたり歩行者を眩惑させてしまえば、お客様が非難されることになるのだから、ヘッドライトの検査方法を正しく理解しているのか、今一度、確認した

いものだ。

そろそろお買い時?

すでに現在、初回および2回目の車検を迎える乗用車は基本的に下向きビームで検査することが求められる。

法改正に伴って平成11年前後に発売された“第一世代”に相当する新基準対応テストは、開発期間が短かったためカットオフの視認性を向上させる技術や最高光度点を測定・検査する仕組み作りが熟成の域まで達していなかった。

現在は、視認性・操作性アップを図った第二世代が市場投入され始めている。第二世代はレンズから入力した光をスクリーンへ鮮やかに投影する技法が進歩し、配光パターンを画像処理する機種ではホンダ車が採用し始めている「Zビーム」(本誌「テックインフォメーション」参照)も認識することができる。

遅かれ早かれ「下向きビームによる検査」が主流となる日は必ず訪れるのだから、いよいよ新基準対応ヘッドライトテストの本格導入を検討すべき時期を迎えているのかもしれない。

訂正: テクレーダーNo.27(05年6月号/ATFフィルタ)におきまして、「ATクーラーホースが金属パイプだけで構成された車種には、ATFフィルタの取付けができない」という記事に行き過ぎた表現がございましたので、下記のとおり訂正いたします。
■訂正: ATクーラーホースが金属パイプだけで構成された車種は、ATFフィルタを取付けるための加工が必要になる。